

## 題材開発 1

# オルタナティブ・ドローイング



- 題材1：ねんどの島にめいろをつくって
- 題材2：生命の曲線を表現しよう
- 題材3：芒と蒲を描く
- 題材4：草花で平仮名文字ドローイング
- 題材5：鎖でドローイング
- 題材6：毛糸でドローイング
- 題材7：線の標本
- 題材8：線のタイル
- 題材9：線を[ならべてーみる]こと
- 題材10：線のタイルで鑑賞あそび

### 線の多様な姿

対象を観察し写し取ろうとする線。紙の上をさまよう線。記号をしるす線。これらの多様な線の表現を生み出す基底の場所。それが絵画教育ではないかと、私たちの研究プロジェクトでは考えています。

### 始原の線

20世紀の絵画は、自らの根源を求めて純粹化し、再現性も記号性もそぎ落として、「かたち」以前の姿を見せました。そこには色の広がりや輝き、そして描く行為の痕跡のような線が—あたかも不在証明のように—残っていました。今回の「ドローイング教育」の原点は、この原初的にも見える線の世界です。これはあたかも幼児が最初に紙に印す震える描線のようにでもあり、私たちに、美術教育を始めるべき場所を教えてくれているようにも見えます。

### 身体と線

美術教育の始まりの場所。今回、私たちはそれを「線」と「身体」として、そこから始まるドロー

イング教育のビジョンを探ってみました。それが次頁以下に紹介する十個の題材です。

いずれも、身体感覚の世界から視覚的な絵画世界への展開を促す題材だと言えるでしょう。それは丁度、20世紀末から20世紀初頭へと絵画の歴史を遡るような動きであり、この動きのなかに、私たちは美術教育の実践と理論の二者が統合されていく場所を見えています。

### 視覚性と平面性へ

身体の様々な感覚を生かした造形活動から出発し、次第に視覚性と平面性に収斂していく指導を構想していくなかで、線はいつも多義的な姿を見せるようです。視覚は身体の諸感覚と密接に関連し、見ることの奥底には触ることが潜み、線のかたちは、それを生んだ手の運動を思いおこさせ、時には記憶の深いところにある別のかたちを呼び覚まします。以下の題材の実践のなかで、そのような様々な動きを子どもの作品に見て頂きたいと思っています。

[永守基樹]